

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 16 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720198

研究課題名(和文)使役移動表現の類型論に関する研究

研究課題名(英文)Typology of Caused Motion Expressions

研究代表者

守田 貴弘(Morita, Takahiro)

東洋大学・経済学部・講師

研究者番号：00588238

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：知覚した空間移動を言語で描写するとき、フランス語と日本語は同じ表現パターンをとるため、同じ言語類型に含まれると考えられてきた。本研究では、移動表現を主体移動(主語が指すものの移動)と使役移動(目的語が指すものの移動)に分け、フランス語と日本語の比較および主体移動と使役移動という事象間の比較を行うことで、類型論に一貫性があるかどうか検証を行った。成果は次の通りである。主体移動表現においては日本語の表現パターンがほぼ一定であるのに対し、フランス語では視覚的な際立ちに応じて表現パターンが変動することが明らかとなった。また、両言語とも、主体移動と使役移動では表現パターンが異なる結果となった。

研究成果の概要(英文)：French and Japanese have been categorized in the same type of languages in light of the expression patterns of perceived motion events. The present study categorizes the motion events into self-agentive motion in which the referent of subject moves and caused motion event where the referent of object moves, and investigates coherence of expression patterns between French and Japanese on one hand, and between the two types of motion events in each language on the other hand. The results of this study are as follows. In the expressions of self-agentive motion, Japanese follows a stable expression pattern with a deictic verb in the main verb position, while French expressions vary according to the saliency of perceived visual information. The other comparison on the event types shows that both languages use different expression patterns between the self-agentive motion and caused motion.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：類型論 自律移動 使役移動 フランス語

1. 研究開始当初の背景

移動表現の類型論ではフランス語と日本語は同じ類型に含まれる。これらの言語は、「入る」*entrer*、「出る」*sortir*、「上る」*monter*、「下りる」*descendre*のように、移動の経路を主動詞で表す動詞枠付け言語に分類されており、経路が *into*, *out*, *up*, *down* といった衛星(動詞周辺要素, *satellite*)で表される英語のような衛星枠付け言語とは異なる類型だということである。

だが、本研究開始当初、主体移動表現に関してフランス語と日本語の間で表現パターンに違いが生じることがあり、移動事象を網羅的に記述した場合、類型論にどの程度の一貫性があるのか分からないことが指摘されていた。さらに、当時の研究は主体移動に集中しており、特にフランス語の使役移動表現についてはほとんど研究されていない状況にあった。そのため、移動表現の類型論を総合的に論じるためには記述範囲を拡大する必要性があった。

2. 研究の目的

上記の背景に鑑み、本研究は以下の2点を主たる目的とした。

(1) 動詞の分類および分類方法

この類型論では表現パターンを決定する上で主動詞の表す意味が何なのかという点が極めて重要であるため、使役移動表現に記述を拡大するにあたり、使役移動動詞の分類を第一の目的とした。また、方法論的にも、主体移動の研究においては動詞の分類が表現類型を決定する上で混乱を生じさせることがあったため、可能な限り直観的な意味理解に拠らない、検証可能な分類方法を確立することを目指した。

(2) 類型論における日本語とフランス語の地位の解明

先行研究で行われていたのは主体移動に関するフランス語と日本語の比較のみであり、使役移動における両言語の比較という観点、あるいは各言語における事象間の比較という観点からの研究は行われていなかった。そのため、これらの多角的な比較を行い、表現類型の一貫性を分析することにより、移動表現全体を射程に含めた類型論における日本語とフランス語の地位を明らかにすることを目標とした。

3. 研究の方法

動詞の分類については、文学作品をデータとしたコーパスを作成し、そこに含まれる主体移動および使役移動を構成する動詞を抽出・選定し、事象構造、アスペクト、結果性といった観点から分析を行った。だが、研究を進める中で、使役事象は使役行為の終結点と移動事象の終結点という2つの終結点を持っており、アスペクトや結果性に関するテ

スがどちらの終結点に反応しているのか判然としないことがあったため、従来通りの意味解釈という方法も加えて分類を進めた。

表現パターンの類型論については、動詞の分析に用いたコーパスと並行して、実験ビデオを用いて発話データを収集した。この実験ビデオは国立国語研究所共同研究プロジェクト「空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究」において作成したものであり、3種類の経路、3種類の様態、3種類の方向などの組み合わせによってビデオクリップは構成されているため、表現が変化したときの要因をコントロールできるようになっている。

フランス語のデータについては2011年12月および2012年12月の2回にわたってパリ第3大学の一般・応用言語学・音声学研究所において実験を行い収集した。収集した発話データは文字起こしの後、移動を構成する意味要素および統語的機能についてタグ付けを行うことにより、数量的に対照研究が可能となるように整理した。なお、日本語データについては上記共同研究プロジェクトの他の研究員によって収集されたものを利用した。

4. 研究成果

研究期間内における主な成果として、(1)動詞の分類に関する方法論的成果、(2)主体移動に関するフランス語と日本語の対照研究の結果、そして(3)フランス語における事象間の一貫性に関する成果およびそれがもたらす類型論の全体像に関する示唆という3点を挙げることができる。

(1) 動詞の分類

研究の目的(1)に対応する結果は当初の予想とは異なり、動詞の分類そのものという成果ではなく、言語学における分類の方法論やその妥当性に関する科学哲学的な成果となった。

研究目的の段階では、可能な限り直観を排したテストによって分類を行うことが望ましいという前提に立っていた。科学論的にはこの前提は間違っていない。しかし、言語の研究において、一定の操作に対する恒常的な反応によって分類を行うという完全な科学的手法を使うことには限界があり、特に使役移動動詞の分類のように、意味が関わるときに客観的に検証可能なテストを使うのは極めて難しい。そのため、科学的な分類方法を追究するのではなく、科学的な方法が使えないときに分類を正当化するために必要となる条件を検討するという方向に方針転換した。

言語学における諸分類の分析および科学哲学的な考察を通じた結果、分類の妥当性は研究目的に照らして決定されるものであり、当該の分類目的が他の研究者とどの程度の共有可能性を持ち、どの程度の範囲の事象に

適用可能であるのかという普遍性によって判断されるべきであるという結論に至った。

意味的分類、直観的分類であっても類型論を行う上で有用な分類であれば一定の正当性が認められることになるため、以下に説明する具体的な言語分析においては、従来の動詞分類を再検討した上で適用した。

(2) 主体移動の類型論

主体移動表現において、フランス語と日本語の間には体系的な違いがあることが明らかとなった。すなわち、これらの言語は動詞枠付け言語として同一類型に含められていたわけだが、経路や様態、移動の方向によって使われる主動詞のタイプが変わるフランス語に対して、どのような知覚情報が与えられても一貫して直示情報「行く」「来る」が主動詞で表現される日本語という違いである。

さらに、実験ビデオの範囲内において、フランス語の主動詞が表す意味を決定する視覚的な情報もほぼ特定することができた。移動が明確な境界を含んでおらず、単なる到着であるとき、主動詞が様態を表し、経路が前置詞句で表されることが多い。つまり、このような場面については *marcher le long de* (walk along) や *courir vers* (run toward), *sautiller jusqu'à* (skip up to) のように、英語に類似した表現パターンが増加するということである。逆に、移動が上方向であるときや明確な境界を含んでいるときには、経路は主動詞で表され、様態情報は表現されないか、ジェロンディフで表現されることになる。具体的には *monter* (des escaliers) や *entrer* といった動詞の使用率が高くなり、このような状況で様態動詞が主動詞で使われることは非常に少ないという結果である。

フランス語と日本語の相違として直示動詞の使用率が違うことは以前から指摘されていた。本研究の結果もこの傾向を裏付けているが、同時に従来とは違う知見も得られた。それは、日本語の「行く」「来る」に対して *aller*, *venir* の使用率が低いことは確かであるが、フランス語で直示情報を表すのは動詞ではなく、*vers moi* (toward me) のような前置詞句であることが圧倒的に多いということである。フランス語は複雑述語や複合動詞をもたない言語であり、唯一の主動詞位置をめぐっては経路動詞、様態動詞、直示動詞が競合する可能性があると考えられていた。しかし、経路のタイプによっては経路動詞と様態動詞が競合することはあっても、直示動詞はこの競合にほとんど参与しないという結果となった。

(3) フランス語における事象間の表現の一貫性および類型論の全体像について

フランス語において使役移動は主体移動とは表現パターンが異なる結果となった。つまり、フランス語の主体移動では経路動詞が主

動詞として使われることが多かったのに対し、使役移動、特にボールを蹴って移動させるという場面では、*jeter un ballon vers* (throw a ball toward), *tirer le ballon au-dessus du mur* (hit the ball onto the wall) のように、動詞で使役手段を表し、経路は前置詞句で表すという、衛星枠付け言語に近い表現パターンを取ることが多いという結果である。また、物を手動操作で移動させるといった場面では *mettre* (put) が優勢となり、主体移動と同じ動詞枠付け型の表現方法となるなど、使役移動の間でも表現類型が一貫していないことがあることが明らかとなった。

類型論の全体像を考えると、事象によって表現パターンが異なるという結果は、従来の類型論が単純に言語のタイプを論じているわけではなく、表現のタイプに関わるものだということを示唆している。つまり、今後の研究によって明らかにすべき点も残っているが、ある言語が必ず一定の表現パターンにしたがうというわけではなく、事象ごとに使用可能な表現パターンが言語ごとに異なっているということであり、言語の類型は1つの表現パターンではなく、事象と表現タイプの組み合わせによって論じられるべきだという方向に転換しなければならないという可能性を示している。さらに、本研究では主体移動と使役移動という区別の上に研究を進めてきたが、使役移動の中でも表現パターンが異なる結果となった。事象と表現タイプの組み合わせによって類型を考えると、事象構造のより詳細な分析が必要になることを本研究の結果は示唆している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計7件)

1. Morita, Takahiro. 2013. *Quelle est la charge cognitive de l'expression linguistique? — Une étude expérimentale sur la fréquence et sur le degré d'intégration du gérondif dans l'expression du déplacement.* 『東京大学言語学論集』第34号, 85-96, 査読有。

<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/dspace/handle/2261/55571>

2. 守田 貴弘 (2013) 「意味的分類の科学的妥当性」 『言語研究』第144号, 29-53, 査読有。

http://www3.nacos.com/lsj/modules/documents/index.php?content_id=2252 (要旨のみ。刊行後1年を経て本文もダウンロード可能)

3. Morita, Takahiro. 2011. *Intratypological Variations in Motion Events in Japanese and French: Manner and □Deixis as Parameters for Cross-Linguistics Comparison.* *CogniTextes* 6, 査読有。

<http://cognitextes.revues.org/498>. (オンラインジャーナルであるためページ番号なし)

4. 守田貴弘 (2011) 「移動表現研究における経路と様態の概念—移動動詞の分類」『フランス語学研究』第 45 号, 53-61, 査読有.
5. 守田貴弘 (2011) 「移動表現における様態動詞の分類」東京大学大学院総合文化研究科フランス語系学生論文集『Résonances』第 7 号, 107-113, 査読有.

〔学会発表〕(計 7 件)

1. Morita, Takahiro. Encoding Patterns of Motion Events in French. NINJAL Typology Festa. 2014 年 2 月 22 日, 国立国語研究所
2. Morita, Takahiro, Yuko Yoshinari, and Fabiana Andreani. Is Manner expressed in a fore/backgrounded way? — A case in French and Italian. The 12th International Cognitive Linguistics Conference, June 28, 2013, Alberta University (Canada).
3. 守田貴弘 「フランス語は客観的言語なのか?—実験ビデオによる検証」日本フランス語学会例会第 283 回例会, 跡見学園女子大学, 2012 年 12 月 1 日.
4. 守田貴弘 「言語表現における『認知コスト』とは何か」, 日本フランス語フランス文学会秋季大会, 神戸大学. 2012 年 10 月 20 日.
5. 守田貴弘 「分類の戯れ, 言語学の目的」日本フランス語フランス文学会ワークショップ「科学としての言語学が切り捨てた問い—言語科学の哲学に向けて」(司会: 酒井智宏, パネリスト: 山口裕之, 守田貴弘, 酒井智宏), 小樽商科大学, 2011 年 10 月 9 日.
6. Morita, Takahiro & Miyuki Ishibashi. Motion Events and Caused Motion Events in French and Japanese: With Special Reference to Deixis and Manner Expressions. The 11th International Cognitive Linguistics Conference, Xi'an International Studies University (China), July 13, 2011.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

守田 貴弘 (MORITA TAKAHIRO)

東洋大学経済学部講師

研究者番号: 00588238